

遺族厚生年金「改正」案に対する声明

2024年9月2日

全日本年金者組合

7月30日、第17回社会保障審議会年金部会に遺族厚生年金の次期改正案が提案され、一部の女性委員を中心に懸念が表明されたものの承認されました。ジェンダー平等の名目に遺族厚生年金について「子のない妻」への支給期間5年で打ち切るのには許されません。

遺族厚生年金は夫が死亡した場合、妻は年齢に関係なく遺族厚生年金の権利が発生し、妻は再婚しない限り終生受給することになっていました。

ところが2004年の年金「改正」で30歳未満の子のない妻には5年間で打ち切られる「改正法」が成立し、2007年4月から実施されています。

妻が死亡した場合の夫は55歳以上でなければ遺族厚生年金の権利が発生せず、支給は60歳からとなっていますから男女間に格差があります。

しかし、今回の提案は「男女平等にするため」として、60歳未満の「子のない妻・夫」とも遺族厚生年金は5年間で打ち切るというものです。ここでいう「子のない妻・夫」の子とは18歳以下か20歳未満の障害のある子を指します。

従って60歳以上の高齢者を除いて遺族厚生年金は5年間だけの支給に制限されていくこととなります。夫は改善されますが、妻は終生を5年に制限されることになり、納得できるものではないでしょう。30日の年金部会では女性の就業率が2040年代は80%後半、賃金格差は40歳未満であれば男女差は80%と示し、格差は解消されるように見えます。しかしこの賃金格差の資料では臨時と短時間労働者を除くとされています。女性の非正規労働者は5割を超え、女性の短時間就労者は1000万人以上だとされています。資料から除かれた臨時と短時間就労者をに入れて計算すれば「賃金格差が80%」とは言えません。とても正確な実態を反映しているとは思われません。

女性の正規労働者が8割9割を占め、短時間就労者を含めた賃金格差が解消され、安心して生活できる保障がなければ、5年間有期の遺族厚生年金の改正は拙速です。賃金との二重給付により過大な所得になると懸念されるなら在職老齢年金のように遺族厚生年金の支給停止も考えられます。

全日本年金者組合は、ジェンダー平等を理由に「男女同一」を言うのであれば現在の妻の遺族厚生年金に合わせることを求めます。